

□ 作曲

石塚潤一

2019年には、矢代秋雄、黛敏郎、松村禎三、間宮芳生、湯浅譲二の5人の作曲家が生誕90年を迎え、これを記念して、池辺晋一郎プロデュースによる、5人の作品を集めた室内楽コンサートも開催された(7/12)。黛については、オペラ《金閣寺》を二期会が上演(2/22-2/24)、間宮もオペラ《ニホンザル・スキトオリメ》が、オーケストラ・ニッポニカにより初演以来53年ぶりの再演(1/27)。松村は映像音楽を含めた個展が開催され(8/5)、湯浅は2回に分けた記念コンサート(7/13,7/27)が開催。寡作の矢代は個展こそ開かれなかったものの、山田和樹指揮、NHK交響楽団による《ピアノ協奏曲》(独奏：河村尚子4/19)、井上道義指揮、新日フィルによる《交響曲》(5/5)など、大きな作品の再演が幾つかあり、5人の作曲家のアンヴァーサリーに沸いた。

1929年生れは、日本の作曲界においてある種の節目に立つ世代といえる。第一に、音楽における系統立った早期教育を受けられたのは最初の世代であり、特に、16歳で東京音楽学校に学んだ矢代と黛が、この傾向を代表する。若くして俊才として知られた二人は、ともにパリ・コンセルヴァトワールに学び、特に矢代は帰国後に日本のアカデミズムの中核となる。第二に、敗戦による社会の変化により上世代は影響力を失い、彼らは20代の若さで音楽界の一線に立つことができた。自費で集めたオーケストラで《渥美交響曲》を発表し、59年の皇太子ご成婚、64年の東京オリンピックといった国家的イベントに、30代の若さで関わった黛が好例だろう。アカデミズムに立脚する作曲家ばかりではない。たとえば、5人の中でアカデミックな立ち位置から最も遠い湯浅は、「実験工房」の作曲家(他に武満徹、福島和夫など)の中でも評価が遅れていたが、電子音楽や放送音楽で頭角を現し、30代の後半には最初の管弦楽作品を書くチャンスに恵まれている。

対して、現役世代の作曲家を取り巻く状況はどのようなものか。1991年から毎年1回開催されている芥川作曲賞は、本年よりサントリー芥川也寸志作曲賞とその名称を改めた。本賞では「わが国の新進作曲家のもっとも清新にして将来性に富むオーケストラ作品を対象に」(広報HPより)、前年に初演された作品の中から3〜4作品を選んで実演にかけ、3人の審査員が公開討論ののち、受賞者を決定する(本年は8/31開催)。本年ファイナリストとなったのは、稲森安太己、北爪裕道、鈴木治行の3名(結果、稲森が受賞)。いずれも、例年なら難なく受賞してしかるべき実力の持ち主である。一方で、今回の芥川作曲賞は、例年とは一風変わったものとなった。ノミネート作に、いわゆる標準編成のオーケストラ作品は一つもなく、稲森作品は大アンサンブルのため、北爪作品も大アンサンブルにエレクトロニクスによる音響が付随する体で、鈴木作品も室内管弦楽のためのものであった。通常、当作曲賞のノミネート作品は、武満徹作曲賞、日本音楽コンクールなどでの入選曲、藝大モーニングコンサートに代表される音楽大学の学内コンサートでの演奏曲、そして海外で初演された作品などから選ばれるが、今回のノミネート結果は、オーケストラ作品の概念を拡大解釈して20人前後のアンサンブル作品にまで門戸を広げなければ、「良い作品」は集まらないという、審査員(南聡、齊木由美、坂東祐大)の見解の表明とも取れるだろう。

もう一点。今回芥川作曲賞にノミネートされた3人の年齢は、北爪(32)、稲森(41)、鈴木(57)となる。32歳の北爪はともかく、41歳、57歳の作曲家を「新進」と呼ぶのは、——読者が演奏家である場合は特に——違和感があるろう。もちろん、57歳の鈴木が、昨今デビューした遅咲きの新人であるはずもなく、95年に入野賞、2000年に毎日映画コンクール映画音楽賞を受賞

するなど、相応のキャリアもあり、高い評価を受けてきた。しかしながら、そうした作曲家を「新進」の枠で評価しなくてはならないところに、現代の創作を巡る問題がある。冒頭に挙げた1929年生れの5人のように、優れた活動をしているうちに社会がこれを抱え上げ、管弦楽曲の作曲、ひいては国家的プロジェクトに参画させる、ということはやはり期待できない。室内楽や独奏曲、あるいは合唱曲で評価を確立しようとも、それらは創作界の一部に停留するのみで、一般的な指揮者やオーケストラ等の楽団にすら共有されず、新たな評価の場に立つことがない(特にオーケストラは、新たな才能に対する嗅覚を完全に失っており、これが、ノミネート対象を大アンサンブル作品にまで広げないと、芥川作曲賞に「良い作品」が集まらない理由でもある)。結果、彼らは50歳を過ぎて「新進」に留め置かれる。

ならば、創作は下火なのか、という疑問が生じようが、それは必ずしも正しくない。例年当欄で紹介している、首都圏の現代音楽演奏会情報を発信するサイト「現代音楽イベントカレンダー」によれば、2019年のイベント総数は474にも及ぶ。首都圏、ほとんど東京近郊のみでこの数字である。新国立劇場での西村朗のオペラ《紫苑物語》(2/17,20,23,24)をはじめ、NHK交響楽団Music Tomorrow(藤倉大の尾高賞受賞曲を再演、藪田翔一の新作を初演5/28)、作曲家の個展II(細川俊夫と望月京の二人展、各々一曲の新作初演あり11/28)など、大きな催しもあれば、松平頼暁(10/30)、三善晃(2/6)、一柳慧(3/9,10)、高橋悠治(10/29)、池辺晋一郎(4/19)、福士則夫(6/25)、松下功(2/14)、木下牧子(6/19)、藤井喬梓(3/11)、鈴木陽子(10/23)、川島素晴(9/5)、佐原詩音(5/6)、桑原ゆう(7/19)、波立裕矢(9/7)など、ベテランから文字通りの新進まで、個展を開催した/された作曲家も多い。アンサンブル・ノマド(藤倉大新作など10/5)、東京シンフォニエッタ(新実徳英初演、稲森安太己舞台初演など12/9)、東京混声合唱団(新垣隆新作など12/14)、東京現音計画(平石博一、中橋愛生新作など12/18)、低音デュオ(福井とも子、小出稚子、桑原ゆう新作など4/24)、といった、当欄では馴染みの演奏団体も活動を続け、同じく当欄常連の合唱指揮者西川竜大は、5団体を指揮して11作(ヴォクスマーナで、安野太郎、星谷丈生、伊左直直3/14、杉山洋一、夏田昌和、伊左直直7/30、空で飛田泰3/5/26、クール・ゼフィールで森田泰之進、藤井健介10/14、成蹊大学混声合唱団で山根明季子12/1、暁で近江典彦12/22)を初演している。

かねてより当欄で指摘してきたように、近年、演奏会を行うための「参入障壁」は下がり、創作の現場は一定の活況を呈している。しかしながら、先行世代の状況と比べると、より限られたリソースが、多くの表現者の中に拡散/消尽されている形となり、メディアもこれを追いつけられてはいない。たとえば、上で紹介した14人の作曲家たちの個展の、その半分にでも立ち会った音楽評論家等メディア関係者が、筆者以外にどれだけのだろう? 活況を示していても、メディアに載るか、あるいは自前のメディアを作ったの発信がなければ、社会的には存在しないのも同義。芸術音楽の創作の困難はその社会性の問題でもある。

これに対抗する動きが一部にある。作曲家によって組織される団体には、日本作曲家協議会、日本作編曲家協会等、幾つかあるが、日本現代音楽協会(現音)は、特に芸術音楽の作曲家によって組織された団体としてのユニークネスを持つ。2019年4月に、特定非営利活動法人となった現音では、現在、作曲家のデータベースを構築中で、これは滝廉太郎から現代の若手に至る、日本の芸術音楽についての一大情報集積地となる予定という。散り散りになることで不可視化していた作家たちの創作が、集まり集められる中で、いかに社会的な存在感を獲得するか。日本の芸術音楽の将来を占う試みといえよう。

結びに。2019年は、芝祐靖(7/5)、原博巳(8/24)、野坂操壽(8/27)といった、日本の創作に大きな役割を担った演奏家を相次いで喪い、海外からは、ギャ・カンチェリ(10/2)、ハンス・ツェンダー(10/22)の訃報も届いた、喪失の年としても記憶されるだろう。